

「ジェンダー平等」について考えてみた
やまなしわかものマガジン



Contents

- 子どもたちとジェンダー
- 性教育の大切さ～これからの性教育～
- “なっちゃん”に聞いてみた
- LGBTQそしてジェンダー
- 女性の政治参画を考える



SDGs × 『ジェンダー平等』を考える学生ワークショップ について

地球上のさまざまな問題を解決するために、世界中の国々が力を合わせて2030年までに達成しようと決めたSDGsの17の目標のNo5に「ジェンダー平等」が掲げられています。また、ジェンダー平等はひとつの独立した目標であるだけでなく、全体の目的、ほかのすべてのゴールを達成するための「手段」でもあり、SDGsの中でもとても重要なテーマです。

性別による差別を無くし、すべての女性と男性が対等に、権利・機会・責任を分かち合える社会を作ること、女性が自分のことを自分で決めながら生きる力をつけられるようにすること、それがジェンダー平等です。ジェンダー平等は人権の達成の上で根本的なものであり、社会的及び経済的に不可欠なものです。

私たちの意識の中には、「女性はこうあるべき」「男性はこうあるべき」といった固定観念や偏見、思い込みが知らず知らずのうちにできてしまっている現状にあり、すべての人が平等に、自分らしく生きられる社会を実現するために越えなければならない大きな壁のひとつとなっています。

この壁を乗り越えていくためには、若い世代の力を借りて社会全体の意識改革を図っていくことが重要です。そのため山梨県では、若者を対象として、ジェンダー平等とは何か、ジェンダー平等社会を実現するにはどんな課題があるのかを学ぶワークショップを実施し、最終的には、そこから学んだことや思いを、若者自身が社会に向けて発信する事業を企画しました。

令和5年夏、県内の高校生・大学生10名がこの事業に集い、探究活動を開始しました。

8月～11月までに4回のワークショップを行い、身近な課題や疑問から探究するテーマを見つけ、4つのグループに分かれてジェンダー平等について学びました。探究を進めていく中で、学生たちは色々な方に出会い、話を聞き、アンケート調査や街頭インタビューを行うなど、自ら行動して“ジェンダー平等社会に必要なこと”をつかんでいきました。

この情報誌には、学生の探究の成果、考えたこと、同世代の若者や社会に伝えたい思いが詰め込まれています。ひとりでも多くの方にとって、ジェンダー平等を考えるきっかけとなるよう、願いを込めた一冊となっています。



SDGsの目標NO5「ジェンダー平等」ってなんだろう。県内の高校生や大学生が、身近にある課題を見つけ、いろいろな人に会い学んできたことを発表・情報発信。

(表紙タイトル・イラストについて)

4回目のワークショップで、参加者みんなで冊子タイトルのキーワードを出し合いました。その中から、うれしい、たのしい、繋ぐ(connect)、色とりどり(colorful)、個性(character)、chart(海図)などの「しい・C」と「やまなし」をつないで冊子タイトルを「**やまなC**」にすることとし、参加者の甲府東高校 磯野あやめさんが、みんなのイメージをイラストにしてくれたものです。

学生たちが取り組んできたこと

県内でジェンダー平等に関わる活動に取り組む団体や個人の話を書く、会いたい人に会いに行く、グループでまとめる、考える、専門家と対談する、発表する、意見を言う、疑問をぶつける、行動する、書いてみる …… スタートから6ヶ月間、様々な活動に取り組みました。



【第1回目ワークショップで御協力いただいた団体】



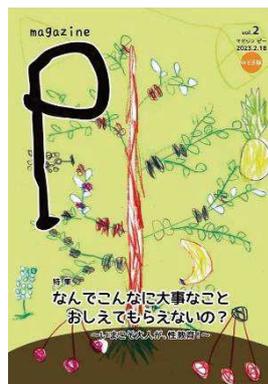
NPO 法人 bondplace

<https://www.bondplace.org>



こどもみらい labo

<https://kodomomirailab.wixsite.com/website>



かけがえのない大切な命を自分で守る心と体づくりのための健康安全郷育
RHYTHM OF LOVE リズム・オブ・ラブ

<https://heartandbody.net/>

こどもたち と ジェンダー

山梨大学4年 馬場 結万

大学でジェンダー関連のテーマに興味を持ち、卒業論文ではジェンダーに関連した研究をしています。その中で、「隠れたカリキュラム」という言葉を知り、実際の学校現場ではどのような現状があるのか気になりました。



山梨大学4年 渡辺 真由

フィンランドの育児支援制度に興味を持つ中で、フィンランドには「イクメン」という言葉はないと知りました。

性別に関わらず誰もが子育てしやすい社会を作っていくために、今私たちができることは何かを考えていきたいです。



チーム A 自己紹介

甲府南高校1年 小松 咲希

高校生の私にとって身近な場所である「学校」に隠れているジェンダー問題について気になりました。今回のワークショップを通じて、現在の学校教育の現状を知り、何か世の中に問題提起できればと思いました。



私たちのグループでは、「幼少期からの声かけや環境が、個人のジェンダー意識に大きな影響を与える」と考えました。

そこで、峡東地域を中心に、子どもたちが生き生きと暮らせる未来を目指して様々な活動をしている団体「こどもみらい Labo」の松川清美さん、小学校で子どもたちの教育に携わる、石和東小学校教諭 早川恵子さんのお二人から話しを伺い、「子どもたちが自分らしく生きていける社会」について、あらためて考えてみました！

そんな3人が集まったのが
チーム A !



インタビュー①

こどもみらい labo

松川清美さん



「子どもたちが自分らしく生きられる社会をつくりたい」

—学校など子どもへの身の回りの声かけで引っかかることはありますか？

子どもが小さい頃から、ジェンダーが身の回りにあるということを実感に感じます。「男の子はやんちゃ」「女の子は育てやすい」などは、全ての男子女子に当てはまらず、根拠がありません。年代問わず、ジェンダー観の底上げが必要だと感じています。

—女子は文系、男子は理系などといった、固定的な考えはなぜ存在するのでしょうか？

無自覚で無根拠な大人から子への刷り込みが脈々と続いているからだと考えます。例えば「女子は理系が苦手」という理系バイアスが日本は強いのです。でも国際学力テストPISAの、日本女子学生の理数系成績は世界トップレベル。生きやすさ、少子化や賃金格差にもつながります。見えない鎖を見抜く目を手に入れたいですね。

—実際、こどもみらい Labo さんが行った『ジェンダーワークシヨップ』に父親は来ましたか？

全員母親でした。ジェンダー＝女性の問題という印象があるかもしれないませんが、有害な「男らしさ」から男性を自由にします。

日本の男性は世界一労働時間が長く、女性は世界一睡眠時間が短い。人間が男女別に縛られ誰もが疲れている。そんな世界は私たちの世代で終わりにし、誰もが自分らしく生きられる世界を子どもたちに手渡ししましょう。

インタビューを終えた感想

一つひとつには、大きな意味を持たないような声かけや働きかけも、それを当たり前のような環境にしてしまうことで、ジェンダー格差は大きく広がっていくことを改めて感じました。松川さんの熱い思いを受け、私たちもより良い社会を作っていく一員になりたいと思いました！



インタビュー②

笛吹市立石和東小学校

早川恵子さん

「一人一人の個性や多様性が尊重される世の中へ」

— 小学校の現場でジェンダーを意識していることはありますか？

自身が学生の時にはジェンダー教育を受けていなかったのですが、正直意識ができていませんでした。子ども達と接する中で気づかされることが多く、意識するようになりました。ある日、無意識に「男の先生なのに、ピアノが上手」という言い方をしてしまった時に、子ども達からその言い方はおかしいと指摘されたことがあって、自身の隠れたバイアスに気づいたこともありました。

— 子ども達の中に男女格差を感じたことはありますか？

大人たちに比べて男女格差は小さいように感じます。それは、社会的に男女格差が小さくなってきている時代に生まれたからだだと思います。中には、「僕は男子だから」と言っつて、力仕事を率先して手伝ってくれる児童もいます。男兄弟の中で育っているなど、家庭環境の影響からこのような発言をする児童も少なくありません。でも、全体的に見

ても、大人に比べると、かなりジェンダーに対しての理解があると感じます。

— どのような社会になって欲しいと考えますか？

性別に関わらず、一人一人の個性や多様性が尊重される社会になってほしいと思います。子ども達が、自分が必要とされていると思えるような社会になってほしいです。それぞれのやりたいことができたり、満足して生活できたりする社会になれば良いと思います。子ども達の居場所が充分にあるよう、環境を整えていける社会でありたいと思います。私も努力していきたいです。

インタビューを終えた感想

子どもの方が、よりジェンダーフリーな社会を生活していることを実感しました。「大人になっても、子ども達から多くのことを学んでいます」という早川先生のお話を聞き、まずは私たちも謙虚な姿勢を持ち、自らの些細な発言や行動を見直すことが大切だと感じました！

わたしたちが気づいたこと



POINT

①

まずは現状を知ることが大切である。

山梨県の女性校長の比率は全国最下位、ジェンダーの親子でのワークショップに参加するのは全員母親…。現状を知らないと何も変わらない！



POINT

②

ジェンダーは日常に潜んでいる。

無意識にする声かけや関わりが、子どものジェンダー観に影響を与えているかも？
だからこそ、意識して声かけや働きかけを行うことが大切である！



POINT

③

子どもの方が、ジェンダーフリーな社会 を生きている。

性別関係なく、誰もが自分らしくいられる社会を全員で目指そう！

最後まで読んでいただき、ありがとうございました！

チームB

性教育の大切さ これからの性教育

現在、ニュース等で「性暴力」という言葉をよく耳にする。しかし、日本の学校における性教育は、理科の生命分野や、保健体育の授業の一環でしか行われていないこと、授業で「性交」は扱われていないことなどの現状がある。本当に今のままでいいの？性教育がそのまま適切に行われていかなければ、性に関する知識不足によって性暴力や望まない妊娠等が増えてしまうのではないか…私たちは「性教育」の大切さについて考えるため、インタビューやアンケートで社会の現状を知ろうと決めた。

性教育は人権教育

「かけがえない命を愛することが
できる心と体づくり」を共に育
て合いたいとの思い・願いのもと
に、健康で安全な心と体づくり
を推進するプログラムを広く実
施。DV・性暴力の未然防止にも
取り組んでいる渡辺光美さん(リ
ズムオブラブ主宰)にお話を伺っ
た。

QデートDV・性暴力を防ぐた
めには性教育が大切だと思う
のですが

「正にその通り。子どもが小さ
いときから性教育がなされな
いとデートDVなどは防ぐこ
とができないと思っています。
かけがえない大切な命を自
分で守って行くために、正しい
計画的・実践的性教育をするこ
とはとても重要なことです。」



渡辺光美さん(リズムオブラブ主宰)

INTERVIEW 1

Q性教育とはどういう教育だ
と思いますか。

「性教育の根底にあるのは
「人権教育」でもあり、発達
段階に応じて自分の心と体を見
つめ直すことです。」

人権は私たちが自分らしく
生きるために一番大切な事だ
ですが、日本はその後進国で
す。大学生の時にそれに気づ
いて、卒業論文で性教育の重
要性について書いたのです
が、30年前は「なぜそんなタ
イトルにするのか」「どうして
そんなことを論じる必要があ
るのか」、また「そんな論文は
読まない」と男性教官に言わ
れた時代でした。性教育が全
くなされていなかったのにも
関わらず、いわゆる「エロ本」
等で性が商品化されていた。
「間違った」性に関する情報
を、男性が受け取る前に正し
い性教育をすることが大切な
のではないかと考えていま
す。」



学校を 相談しやすい場所に



学校の中では、生徒への性の教育や相談がどのように行われているのか。

10月15日の放課後、県立日川高校を訪問。養護教諭の初鹿野たまき先生に、高校における養護教諭の役割や学校が行う性教育について伺いました。

Q 保健室の来訪者について

― 体調不良者は一日で平均5、6人。始めから相談があるといってくる生徒は少ないです。体調不良で来室したが、あれ何かいつもと様子が違うとこちらが気付いて色々話をきいていくと、実は・・・と抱えていた悩みを打ち明けてくれることが多いです。また、普段から来室が多い生徒は特に気に掛けません。

Q 生徒から、性に関する悩み相談はありますか

― 性に関する悩み相談を受けることは稀です。過去に勤務した学校で望まない妊娠や性感染症についての相談を受けたことがありました。そういった内容は、生徒の方も相談しにくいのが現状ではないかと思えます。

Q 日川高校では性に関するワークショップを生徒に行っているそうですが

― デートDVについて学び、他にも大切にしている気持ちを育むためのワークショップ（講師・エンパワメントアフロッキーさん）や、エイズや性感染症についての予防講座（健康教育アドバイザー・山田七重さん）を1年次生に対して実施しています。まず自分の心と体を大切にすること、そして自分の周りの人も同様に大切にすることを考えてもらいたいと思っています。

Q 養護教諭が「性教育」に携わることの意義について

― 保健室は「その学校の縮図」だと思っています。その学校がどのような学校なのか保健室の有りようでわかります。また、養護教諭は学校全体を俯瞰できる立場にいます。生徒ひとり一人の状況を把握していて、生徒のニーズがわかっている養護教諭が性教育に携わることは大いに意義があると考えています。

Q 「性」に関する悩みを専門家や先生に相談する割合が少ない事について

― 私が所属する養護教諭の研究組織で研究の一環として行ったアンケート調査結果の中で、誰がどうみても相談が必要なたたえでも、生徒の約51%は誰にも相談しないことがわかりました。誰かに相談すること自体、生徒にとって非常にハードルが高いことが明らかになりました。「性」に関するプライベートルなことになることさらにハードルがあります。私の経験によると、学校によってもその差はあり、普通高校よりも専門高校の生徒の方が、普段からプライベートルについて明らかにしてくる傾向にあり、そうした悩みを相談してくれる生徒が多いです。

Q 相談しやすい体制を整えていくには

― 性の相談に限らず何でも相談してもらうためには、日常的に生徒と真剣に接することが大事。また、教員が生徒の細かな変化に気づける体制を学校全体で整える必要があります。保健室と教員、管理職、スクールカウンセラーなど生徒に関わる多くのスタッフが連携することも非常に大切です。

Q 「性教育」を男女共同で教えることについて

― 過去に「性教育」をした後「性に関して嫌悪感を抱いた」という趣旨の感想を生徒から寄せられたことがあります。高校生でも発達段階に差がありますから、男女共同か否かに限らず、内容、年齢などの状況により配慮が必要。特に、一律で指導を行う時には考慮しなければならぬと思います。

Q 学校の中でジェンダーへの配慮はありますか

― 性別にとらわれない制服（女子生徒のストラックス）の導入など配慮は広がっています。ただし性の多様性についてはセンシティブで個人的なことである為、生徒が悩んでいたとしても表面化しにくい状況にあると思っています。

暴力のない社会
ジェンダー平等社会をめざして



NPO法人
エンパワメントアフロッキー

あなたはたいせつなひと

11月19日には、蕪崎市で行われたエンパワメントアフロッキー（代表理事 望月理子さん）の「ジェンダートーク」に参加しました。

エンパワメントアフロッキーは、ひとりひとりが自分らしくいきいきできるように、暴力のない社会、ジェンダー平等社会をめざして活動するNPOの法人。デートDV＜予防事業・ジェンダー平等事業＞人権啓発事業を行っており、これまでに小中学生・高校生・大学生・大人合わせて約9千人に、デートDV＜予防講座、いのちの安全講座、ジェンダー平等講座などを届けています。また、毎月開催のジェンダートークの会は、性の健康に関する最新の情報を共有し、互いの経験を聴き合っている。パワメントする場になっています。

今回のテーマは『オーストラリアの性教育の緩い側面・厳しい側面』で、オーストラリアで小学校一年生から高校卒業まで学校教育を受けた方（矢野さん）のお話を聞きました。

INTERVIEW 3

（矢野さんのお話より）

日本はオーストラリアに比べて自分中心ではなく、他人軸で生きており、その文化が性教育にも影響している。

オーストラリアでは牧師さんが学校にきて性教育をしていた。その性教育では、好きではない男の子に誘われたときにどうするのか、どういったコミュニケーションがとれるのかをなどを実際に学んだ。「GBIO」についても、「アウトティング」について学ぶために、一人ひとつずつ秘密を一人の人に打ち明ける。その秘密をばらす人を数人作る。その次の日に、一人にしか打ち明けていないはずだったのに、なぜか他の人も知っているという状況にどう感じるかということを考える。生徒が実際に考えることができる授業であるのが特徴である。

また、牧師さんが、自分たちの過去の失敗談などから「トイレに行って帰ってきたら飲み物は飲むな。もしかしたら危険な薬や、睡眠薬を入れられたかもしれないから」などという具体的なことを教えている。

インタビューを終えて

今まで、私たちは「性教育」とは「性行為」や「男女の体の違い」など生物学的なことを、いかに正しく学ぶかだと思っていた。

しかし、今回、「性教育は人権教育の一環」という話を聞き、人間関係や相手の価値観について学ぶことも性教育に繋がるのだということに改めて気づかされた。

「人間関係」をしっかり学ぶことで、交際相手と適切な距離感を保つことができ、どこまでが良く、どこからが相手に不快感を与えたり性暴力になるのが明確にわかるようになるとわかった。

学校現場では、生徒が相談しにくい現状がある中でも、生徒一人ひとりの状況に対応できるよう、学校全体の課題とすることが重要だということ、また、県内でDV・性暴力・性の健康に積極的に取り組む団体が活動していることも知り、とても学びが大きかった。

引き続き、私たちもアンテナを高めて、自分事として考え、活動していきたい。

チームB

都留文化大学1年
花田風沙



山梨英和大学4年
近藤大志



性教育を受けた経験などについて、街頭インタビューにもチャレンジしてみました。



高校生・大学生

アンケート

チーム B

山梨県内の大学生(山梨英和大学・都留文科大学)、また、ワークショップ参加高校生や在籍高校(甲府第一、甲府東、甲府南)にも御協力いただき、県内高校生に対して性に関するアンケートを実施しました！今回は項目を抜粋して掲載します。御協力ありがとうございました。

① 高校生に聞いてみました！ (アンケートからの抜粋)

アンケート概要

- 回答数：105件
- 性別比：男性44.8%・女性53.3%・回答しない1.9%
- 全7問

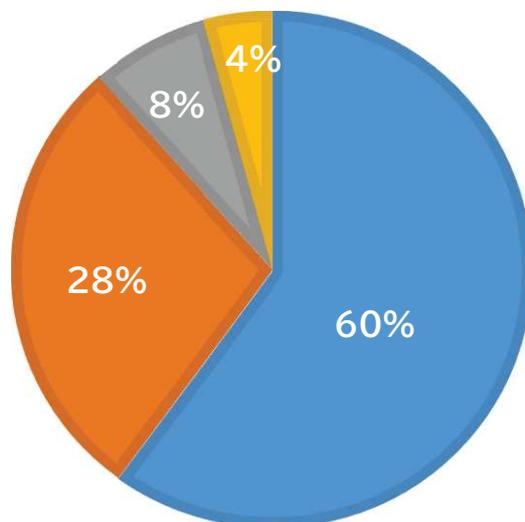
「性教育」で教えて欲しかったことは？

1. 性感染症や望まない妊娠を避けるための避妊の方法。
2. ジェンダーやセクシュアリティに関する知識。
3. 男子生徒に対する月経や生理に関する教育。
4. 特になし。

(105人中65人が回答)

性に関する悩みを相談する相手は？

■ 友達 ■ 家族 ■ 専門機関 ■ 相談しない

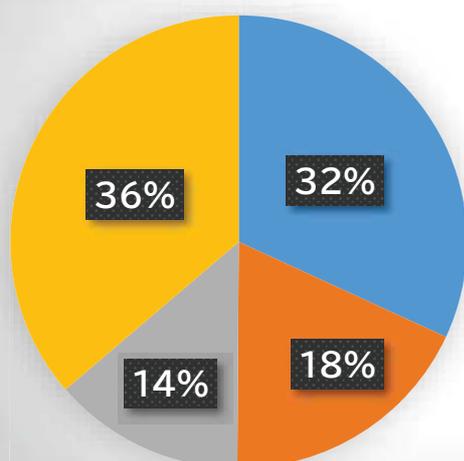


② 大学生に聞いてみました！ (アンケートからの抜粋)

アンケートの概要

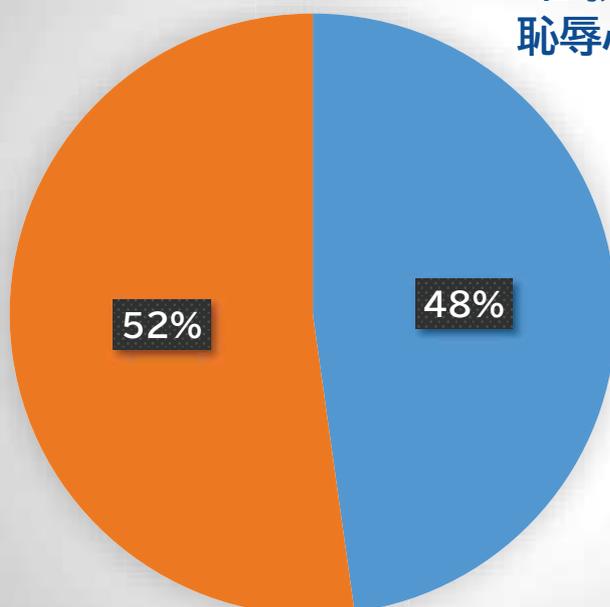
- 「性教育」に関する認知度調査を実施。
- 全12問の選択式 (内1問のみ記述式)。
- 42件の回答を得る (内訳：山梨英和大学23件 / 都留文科大学19件)
- 男女比は、男性：52.2% 女性：47.8% その他：0%。
- 年齢比率は、10代：35.7% 20代：64.3%。

「性教育」において最も重要視されることは何だと思えますか。



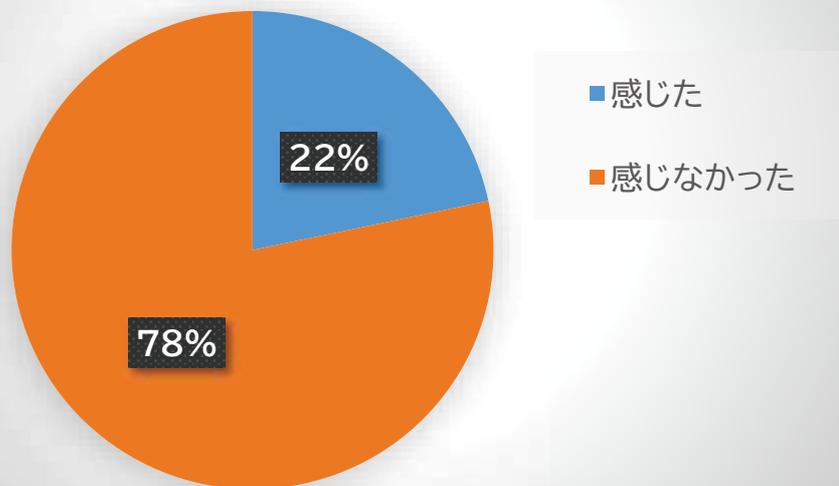
- 妊娠や出産、心身の発育といった生物学的プロセス
- 性感染症や望まない妊娠を避けるための避妊方法
- DVや性犯罪を起こした際の法的処遇・社会福祉における子育て支援等の制度
- ジェンダー平等やLGBTQ等の多様な「性」の捉え方

「性教育」に対して恥辱心を感じましたか。



- 感じた
- 感じなかった

「性教育」の内容に関して疑問や違和感を感じたことがあるか。

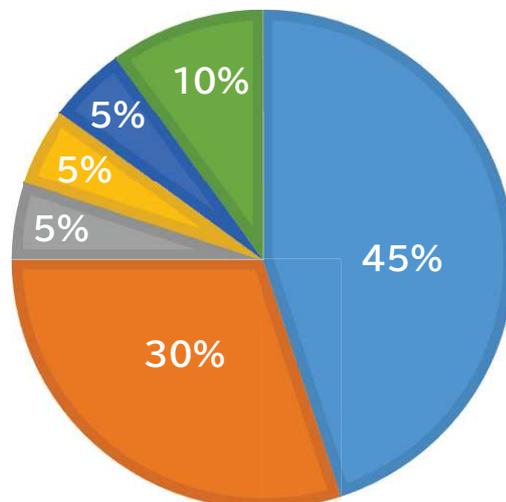


疑問や違和感を感じた理由

1. なんだか肝心ことを教えられていない気がするためです。世の中にはどんな性の方が存在し、その多様性についてや、パートナーに対する接し方など、女性の場合は生理などの重さにも個人差があることなど、もっと教えるべきことがたくさんあるだろうと感じたためです
2. LGBTQに関する内容はさらっとしか触れずに話がその先に進んでいったので、このご時世の中でLGBTQについてやらないのは何故だろうと思った。
3. 子どもができる仕組みや身体の生殖器官について教科書に沿って学んだだけで、DVや性被害、現状起きている性に関する問題を取り上げていなかったから。性犯罪の恐ろしさや子宮頸がん・無精症など男女どちらかに原因がある疾患なども挙げて、もっと身になる性教育が必要なのではないかと思った。

もし、あなたが性に関することで悩んだ時、誰(どこ)に相談しますか。

- 友達
- 先生
- 相談する相手がいない
- 親
- 警察や行政の運営する相談所
- インターネットやSNS



なっちゃん に聞いてみた！！



ワークショップのメインイベントとして、10月、（独）国立女性教育会館理事長であり、ジェンダー研究のレジェンドである萩原なつ子先生と学生が座談会を行いました。またとない貴重な機会に、学生ならではの素朴なギモンをぶつけてみました！

Q. NWE Cの理事長や日本NPOセンターの代表理事など、女性として組織のトップで職務を遂行するうえで苦労したことはありますか？

大小問わず、若い頃からいろんな仕事をして、自分にできるだろうかという仕事を頼まれることもあり、20代の頃から地道に積み上げてきた結果が今だと思っています。女性であるとか男性であるとかではなく、今までの積み重ねや実績から「私」という人間が周りにはこう見えているから、役職を任されているのだと思います。社会文化的に女性であるということで、何か困っていることは特にはありません。性別にかかわらず個人の能力をしっかり把握して、引っ張り上げるということが管理職には求められているので、今、企業の社長さんたちに対して講義もしています。

Q. 管理職の意識が変わることが大切だとわかりましたが、社会に出たばかりの立場の人が意識した方がいいことはありますか？

とにかく、もらった仕事をこなして積み重ねること。この仕事は私には向かないなんてことはなく、それは自分が決めることではないのです。日高敏隆先生（動物行動学者）も、「相手があなたにできると思って頼んでいるのだから、やるんですよ」と言っていました。若いうちは特に、積み重ねていくことで信頼関係もできてきます。

ただ、ジェンダーの問題からは切り離して考えないといけません。例えば、お茶くみなど女性にだけ頼まれることって結構あると思いますが、「これっておかしくない？」ということは男性も女性も一緒に声をあげていく必要があります。その上で、「私自身」に仕事を頼まれたと思ったら、「やらせていただきます！」としていけば、次の女性がついてきます。私たち（ジェンダー平等実現に向けて尽力してきた先人たちが）肩パットを3つも4つも入れて頑張ってきたのは、後輩のためなんですよ。

Q. DVや性被害を防止するために、現在の学校現場での性教育は十分だと思いますか？

まず、性教育というと、どうしてもセックス（性交）の話になってしまいますが、それでは捉え方が非常に狭いです。性教育というのは、リプロダクティブ・ヘルス/ライツとセクシャル・ヘルス/ライツ※の全てを含みます。性にかかわらず、相手をどうリスペクトし、尊重していくかという人権の話なんです。どうしても人権教育というと、何か別物みたいに見られてしまう。でも全部繋がっている話なんですよ。LGBTQについても、属性の話ではなく、人権の話なんです。文部科学省でも子どもたちが性暴力の加害者・被害者・傍観者にならないための生命（いのち）の安全教育を推進しています。しかし、多くの人の中で性教育についてバイアスがある（性教育＝性交の話と考える）ために、学校現場では自主規制をしてしまうんです。相手の命に関わることでもあるので、学校教育だけでなく、色々なところが協力し合いながら、人権という視点で教育を進めていかなければならないですね。

※セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ Sexual and Reproductive Health and Rights（性と生殖に関する健康と権利）

Q. まちづくりでLGBTQの方たちに対してどのような配慮をしていくことが考えられますか？

「まち」そのものがもう多様性なんですよね。年齢から何から、多様な人が存在している。LGBTQは性のあり方が多様な人であって、もっと言うとその方たちも一人の人間としてやっぱり多様なんです。だから、LGBTQの人たちを意識してまちづくりってよりも、一人ひとりに寄り添うようなまちづくりをしていくにはどうしたらいいですかと考える方がいいのかな。性別とか障害とかではなく、「その人」が何に困っているかとか、どういう格差があるのだろうかとか、「その人」に寄り添いながら変えていけるものは変えていこうよとすると、結果としてユニバーサルな誰ひとり取り残さないまちになっていきます。そのためには、カミングアウトしてくださった方のお話をいっぱい聞くこと、聞けることがとても大事だと思います。そもそも、カミングアウトという言葉自体がおかしい気もしますよね。私は私でいいと思える、そういう社会を私たちは作っていきたい。ジェンダー平等社会についてはぜひ、若いうちから、やわらかい頭で一緒に考えて欲しいなと思います。

Q. ネットの書き込み等から男女の間に溝があると感じることがあり、その溝は埋まらないのかなとか、もっとお互いを思いやることができればいいのにと思うことがあります。そんな世の中で、私たちは未来の子どもたちに向けて何ができるだろうかと考えるのですが…。

まさに政治ですよ。個人的なことは政治的なことなんです。一人ひとり悩みがあると思いますが、その悩みが自分個人の責任なのか、それとも社会構造的な問題なのかということ、研究者はいろいろ分析します。例えば、「私はこうなんだよね」と悩みを打ち明け、聞いていた方が「なんだ、僕だけじゃないんだ」となる。コンシャスネス・レイシングと言って、それぞれの悩みを打ち明けていくことで、その悩みは社会構造的な問題なんじゃないかとか、制度的な問題なんじゃないかということを考え、変えていききっかけとなる。

あと、初めから溝って思ったら溝なんだよね。私の大親友である元競馬騎手の岡部幸雄さんも、「壁だと思ったら壁だ」と言っていました。言葉って言霊なので、良い方にも悪い方にも、自分の内面を決定してきちゃいます。溝だと思わなくて、泳いで渡れる川だと思ったらどうでしょうか。否定し合ったり批判し合ったりしたら前に進まないじゃないですか。まずは相手の言うことを聞く。「なるほど」って。受け入れて、自分の中で消化できないものは誰かに相談してみて。そういう場がこういうワークショップとか政治なんですよ。



萩原 なつ子氏 (愛称 なっちゃん)

独立行政法人 国立女性教育会館理事長、認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター代表理事、立教大学名誉教授、山梨県男女共同参画・共生社会推進統括アドバイザー (経歴)

山梨県出身。広告代理店勤務、(財)トヨタ財団アソシエイト・プログラムオフィサー、東横学園女子短期大学助教授、宮城県環境生活部次長、武蔵工業大学助教授、立教大学社会学部／大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授 (R4.3月定年退職)等を経て、現職。

◇NUEC(ヌエック:国立女性教育会館)の名物館長として、全国で知られる。

◇日本の社会学者。博士(学術)。専門は環境社会学、ジェンダー研究、非営利組織論。

◇長年、大学で教鞭をとる傍ら、女性にやさしいまちづくりをめざした『としま 100 人女子会』、消滅可能性都市と言われた「東京都豊島区」の再生に向けて区が立ち上げた『としま F1 会議』の座長を務めるなど、広範なネットワークを生かして、ユニークで斬新な事業を全国各地で仕掛けている。

LGBTQ

そしてジェンダー

性的マイノリティの人に
どんな支援ができる？

私たちは「みんなが暮らしやすい街」について考えたときに、何かで困っている人を助けるために身近でできることは何だろう、と思ふ、LGBTQ(性的マイノリティ)について考えたいという意見で一致した。

誰かを守るためには、周りの支援者が欠かせないことを学校のいじめアンケートや授業を通して学んだ。

しかし実際には、LGBTQに対して、なんとなく自分とは違うと感じたり、特別扱いしてしまうことがある。そこには私たち自身に、何かしらのバイアスがあるからに違いない。

そしてそれは、ジェンダー(社会的・文化的につくられる性別)と同じで、LGBTQの方々を生きづらくさせている原因だと思う。



悩みを抱えていても相談することができない人や精神的苦痛を感じる人が増えていると言われるが、私たち学生にできることなどについて教えていただくこと、社会課題解決のため、人と人とながりが学び合う場づくりの様々な実践活動に取り組んでいるNPO法人 bond place (ボンドプレイス)さんに話を聞いた。

bond place さんに話を伺い、これまで自分たちが具体的な解決方法を考えていなかったことに気づいた。

「もっと知りたい」

という気持ちから、LGBTQ当事者の方や支援団体の方にインタビューをお願いしました

bond place さんに教えてもらったこと



Q 支援のために、まず自分たちが始めることは？

A 傍観者の体制づくりをしよう

Q and A

現状を変えるには、活動が必要！！活動につなげるためには、少しずつ声をあげる人を増やすことが必要です。性同一性障害ということを周囲に話せず、つらい思いをしている人もいます。その人たちを救うために、傍観者である私たちが、専門家などの“相談できる機関につなぐ人”になること。そのための体制を整えていきましょう。もちろん知識をつけること(学び)もすごく大事。

Q 具体的にどうすればいい？

A 足を運べるところに多く支援者(つなぐ人)がいる環境を作ろう

生物学的な性別(sex)に対し、ジェンダー(社会的・文化的につくられた性別)も根付いてしまっている今の世の中。多様な性についても、自分とは違い特殊なことだ、などの固定的な考えから、現在の状況(自ら相談にいける場所が少ない)が作られている。だからこそ、「気軽に行く場所」に“なにげなく”相談できる人が大勢いることが大切。支援者の体制づくりにつながります。

Q 誰かの相談にのるとき、どう進めたらいいの？

A 何が課題となっているか書き出してみよう

PDCA サイクルのように、できることとできないことを図で可視化することで、何が足りないのか明確にすることができる。また、「書く」ことによって気持ちの整理、考えを吟味すること、新たな案を考えることができます。自分に必要とすることをいろんな案から選択することができると思います。



誰もが自分らしく
ありのままの
自分で輝く
小野 明日香さん

小野さんは技術者・経営者として電気保安管理所を営んでいます。誠実に仕事をし、父として子どもたちにも寄り添う一方で、幼い頃から体と心の性の不一致に悩み苦しめ、いじめや心ない言葉、好奇の視線に耐えてきた経験を持っています。名前の変更、声帯手術、男性から女性への性別適合手術を受け、現在は周囲にも性同一性障害であることを明かしています。実体験を通して LGBTQ 当事者である自分の生き方を見つめながら、「一生懸命に一つずつ夢を叶えてきた。いつも自分らしくありたい」とおっしゃる、強い気持ちを持った素敵な人でした。

Q.どんな生き方をしたいですか

A.相手に認めてもらえる自分になる

性別で相手や自分を見るのではなく、仕事を完璧にこなし、“自分自身”を認めてもらえるような存在になる。自分に自信が付くことで、悩みは少なくなると私は思っています。

小野さんは仕事を一生懸命し、お客さんとの信頼関係を築いていたため、性別適合手術をするときも受け入れてもらえた経験から、まずは自分自身を磨かなければ、という強い思いを持っています。



Q.同じ悩みを抱えた方へメッセージを伝えるとしたら

A.制度や助けに甘えすぎない気持ちでいてほしい

辛さはもちろんよくわかっています。その上であえて言いますが、相手に合わせてもらおうという考えだと、周りが手を差し伸べてくれることに甘えすぎてしまう。そうすると、本当に大きな衝撃を受けたときに耐えられないことが多いのです。

LGBTQ の診断はある程度の歳まで育てからのほうがいい、というのが小野さんの考え方。身体や心が未発達なうちは、様々なことを受け止めきれず自殺してしまう人も多いからだ。とにかく生きて欲しい。小野さんはそう願っているそうです。

Q.すべての人に伝えたいことは？

A.諦めずにやり続ければ夢は叶う

明日香さんのことばから

- 夢を持つこと。努力すること。そして性別ではなく「一人の人間」として生きることが大事。
- 今誰かに酷いことを言われていても、人を見返せるくらい努力すれば何も言われなくなる。
- 結論が出る前から諦めてしまっは、何事も成功しない。最初から諦めないで。
- 子供を支える立場の大人は、手を出しすぎず、大きな何かがあったときにこそ手を差し伸べてあげて欲しい。口うるさく言わずに子供を信じてあげて。



ワークショップやインタビューを通じて、今回は「少数派の意見にも耳を貸す」「見て見ぬふりをしない」などの言葉は知っているものの、実際に行動に移しているのか、自分自身を振り返る良い機会を得ることができたと思っている。

また、公共の場で支援者が『なにげなく』いることが大切だと分かった。支援者がいる環境を作るためには、良好な関係性を築く必要がある。

- 相談にのる
- 日ごろから「コミュニケーションをとる
- 話を否定せず最後まで聞く

など「聞き上手」になることが大切だと思う。

また、友達の相談にのるときに、何に悩んでいるのかを一緒に明確にしていくことが重要だと思った。



実際に相談にのるときに、自分でもどのように受け答えをしたらよいかわからなくなり言葉を濁してしまったり、相手が言葉を詰まらせてしまったたりすることが多々ある。しかし、自ら一歩踏み出して相談することとは、とても勇気のいることだと思う。そのため相手の立場に立ち、同じ気持ちで真剣に答えることが大切であると思った。

このように周りの人が何気なく気にかけることで少しずつ現状が変わって行くと思う。

こぶりずむ CoPrism について

山梨県甲府市を中心に、多様な性のあり方について発信し、どんな性を生きる人であっても、自然体で過ごせる場所を増やしていくことを目的とした団体。

どんな性であっても個々人が自分自身のあり方を肯定できる社会
お互いにさまざまな性や生き方があることを知り、共生できる社会

を目指し、山梨で情報の発信や場づくりを通して、日常の中で自分を隠さずにいられる時間や仲間と一緒にいられる時間を増やしていきたいと活動している。(HP から抜粋)

(HP) <https://coprism.jimdofree.com/>



どんな性を 生きていても、 自然体で いられる社会に

CoPrism

代表 飛嶋 一步 さん
十嶋さつき さん

Q 当事者に伝えたいこと

しんどい時はためらわずに助けを求めてほしい。
相談できる、自分の支えになる人は必ずいるので、大変だが相談窓口などに話してみてもいい。

Q カミングアウトについて

するもしないも本人の自由。
もし家族にカミングアウトしようか迷っている人に声を掛けるとしたら、例えばテレビの話題などをきっかけに、相手がどんな反応をするのか確認しながら、カミングアウトするかどうかを決めていくのがいいのではと提案できる。

Q LGBTQ への教育は必要？

学習指導要領には「思春期には異性を好きになる」という記述があった。当事者にはつらく感じる人もいる。

西欧に比べ日本はそういう点の教育が充実していない。

学習指導要領でこういった記述をしなくてもいいという人や、同性婚反対派の人の意見には、「日本の男女が夫婦と子と暮らす父母子という伝統的な形を守っていくべきだから」というものがある。
しかし江戸末期には身体上同性の人が夫婦として暮らしていた記録があり、同性婚によって日本らしさを失うとは決めつけられない。
また、WHO が同性愛や性同一性障害を「疾病分類」から外した。治すべきものではない。
そうした理解を進めるために教育は必要だと思う。

Q 改善してほしいこと

- ・法律婚の適用。(死に際に立ち会えない、遺産相続にかかる税金が高いため、家に住むことすら厳しい生活になることもある)
- ・保健体育などの科目で教えること。
- ・戸籍上の性別の変更の要件緩和。(現在は性別適合手術の必要があり、金銭的な面で断念する人も多い)
- ・就職や就業の差別などに対する法的な対応。

Q 周囲から感じる嫌なこと

自分の周囲では特にならない。差別的な人や心無い発言をする人には近づかないようにしているから。
ただ、自分について本当のことを言うことで偏見にさらされないか不安があり、近づかないことで自分を守っているが、それが幸せということではない。

Q 周囲に求めること

自分の周りにLGBTQ の人がいると思っただけにしてほしい。
誠実に気持ちを伝えながらお互いに関係を深めていきたい。



CoPrism で活動されている飛嶋一步さん・十嶋さつきさんに、当事者と支援者の両方の立場から意見を伺いました。日本の社会における性的マイノリティに関する歴史や、それに伴った社会を取り巻く人々の考え方の変遷を、当事者としての思いも踏まえながらお話いただき、学ばせていただきました。

私たちは多様性の中で生きている

小野さん、飛嶋さん・十嶋さんとお話をさせていたき、当事者の考えにも様々なことも知りました。大切なことは、それぞれの人の望む生き方を尊重し、多様性のある社会が当たり前になることだと思います。課題点を払拭し、SDGsのNo.5「ジェンダー平等」を実現できる社会をイメージすることができました。

LGBTQに関する日本の取り組み

国

- 性同一性障害の性別の取扱いの特例に関する法律
- 性的指向及びジェンダーアイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律

学校

- スクールカウンセラー導入
 - 性的マイノリティに関する資料作成などの取り組みをしている。これらによってLGBTQというものが社会に少しずつ広まってきており、自分の在りたい形を作る支えになっている。
- しかし、まだまだ課題は残っているようだ。

地方自治体(県・市町村)

- パートナーシップ宣誓制度
(山梨県は令和5年11月1日導入)
- (パートナーシップ宣誓制度でできることの例)
- ※自治体により異なる

- ・ 家族として公営住宅などに入居
 - ・ 生命保険の受取人に指定
 - ・ 携帯電話などの家族割適用
 - ・ クレジットカードでの家族カードが作れる
- などができるらしい

(現行ではできないことの例)

- ・ 配偶者控除が受けられない
 - ・ 外国籍のパートナーの場合、異性同士の法的関係のあるカップルで得られるような在留資格を得られない
 - ・ パートナーが亡くなったとき、遺族給付金を得ることができない
- などがあるらしい

社会に求めたいこと

インタビューから、LGBTQ当事者の方々
は、現在の取り組みにより、性の多様性
への理解が少しずつ広がることの流れし
さを感じると同時に、まだ認められてい
ないことがある事にもどかしさを抱いて
いるように感じた。

また、「同性婚を認めてほしい。」「差別をなくす法律や監視する機関があつてほしい。」「などの意見を聞き、法律や制度が人々に大きな影響をもたらすことを知った。

法律や制度を変えるためには、まず私たちがそれらについて知ることや、同じ立場だった場合どう感じるのかを考えて、行動に移すことが必要だと感じた。



甲府第一高校
岡田 琉那

C チーム



甲府東高校
伊藤 聡音



甲府東高校
石田 さくら

ワークショップに参加して、私たち、こんなに変わったよ！

ワークショップに参加する前……



ジェンダーについて考えたこと
ない！それに私は LGBTQ の方
と関わったことなく、自分
にはあまり関係がないって思っ
た。

あの女の子のラン
ドセル、黒色だ。
珍しいね。



ワークショップを通じて気づいた！



私たちは知らず知らず
に、性別や性に関する
偏見にとらわれている
のかもしれない！



私たちにできることって
何だろう。

○ジェンダー社会の現実

- ・ジェンダー平等教育が行き届いていない
→社会の制度が不十分。政治分野の女性参
画が進まないことも要因

○LGBT当事者の現実

- ・カミングアウトによる偏見
- ・性別適合手術をしなければ性別変更できな
い。金銭的に厳しい。
- ・異性婚と同等の権利が得られない

「性別」「性」が生きずらさの原因に

まずは実態を知ろう。知らないのに、無意識に
決めつけていない？ みんな違ってあたりまえ。
固定概念はないか自分を見つめ直そう

そして

一人ひとりが得た知識を周りのみんなに知って
もらい、一人でも多くジェンダーで悩む人を救
う。悩ませる原因となる人にならないこと！

○LGBT当事者の声

「周りに LGBT の人がいないと思わないで」
「差別されることが心配でカミングアウトし
にくい」「誰にも打ち明けられない」
「LGBT は自然なことと知って欲しい。なぜ
軽蔑するの？」
「当事者も考え方は人それぞれ。ひとくくり
にせず、多様性を理解して。」

ジェンダーに関する様々な問題について、今までは、私たち自身と切り離して考えていた部分が多くありまし
た。「自分には関係のないことだ」と無意識のうちに思っていたのです。
しかし、実際にジェンダーと闘った方との貴重なお話や、ジェンダーに関わる最前線で奮闘している方のお
話を伺う機会を得たことで、私たちのジェンダー問題に対する考え方が大きく変わりました。
高校生という年齢ではもはや遅すぎるくらいですが、自分たちに浸透していた表面的なジェンダー問題に対
する考え方を、私たち若い世代と大人の方たちとの対話を通じて見つめ直すことができました。女性が弱い
立場に置かれていることは政治的、文化的、あるいは私たちの身近な環境においても見られることだとも知
り、私たちのような固定概念を持った若者たちの一人でも多くの人に、ジェンダーや性の多様性、LGBT に対
する知識・考えをきちんと理解して欲しい、と強く感じました。

女性の政治参画

を考える



チームD

甲府東高校2年
後藤隆大

甲府東高校2年
磯野あやめ

日本と世界の現状

政治における、女性議員の割合がとても低い

- 政治は男性のもの、という世の中の価値観
 - 女性政治家を育てる環境の未成熟
 - 目指すべき女性リーダー像の不在
- 等の声上がる。また、家庭との両立の自信がないという女性からの意見もあるようだ。

各国議会(下院)の女性議員の割合と順位			
1位	ルワンダ (61.3%)	73位	中国 (24.9%)
2位	キューバ (53.2%)	78位	米国 (23.5%)
3位	ボリビア (53.1%)	81位	シンガポール (23.0%)
4位	メキシコ (48.2%)	121位	韓国 (17.1%)
5位	スウェーデン (47.3%)	131位	ロシア (15.8%)
10位	南アフリカ (42.7%)	165位	日本 (10.2% = 衆院)
60位	アフガニスタン (27.3%)		

源泉における女性の割合の統計 (2018年)

BuzzFeedNEWS より

私たちが考える政策

男性の育児休暇の義務化？
働き方の柔軟化？
クォーター制※の導入？

※政治において議員候補者の一定数を、女性と定める制度のこと。一定数の女性を確保したい際に、あらかじめ割り当てを行う。クォータ制の発祥地で知られるノルウェーでは、法制化によって一般企業にもクォータ制を導入し、女性の社会進出が大きく進んだことで知られる。

クォーター制、
設けるべき？

クォーター制のメリット

議員席を設けることで、政治に対する価値観が変わり女性が立候補しやすくなる。

クォーター制のデメリット

運用に問題が？ 現状では出産や育児期などのライフイベントとの両立が難しい。



萩原なつ子さん(国立女性教育会館理事長)は

「クォーター制はこれからの日本に必要な」とお話しされた。

「日本は少子高齢化社会が進んでおり、女性が積極的に政治に参画して行かない限り、この問題はさらに深刻化していく一方です」と語り、制度化は日本の将来のためでもあるとお話しされた。

INTERVIEW 1



甲斐市議会議員 若尾 彰子さん

保健師として働いていたが、2人目の子どもを出産後に退職。子育てに専念する一方で、自分の望むキャリアを築きたいと、山梨大学にて「女性のためのインターンシップ型ステップアッププログラム」を受講したのち、看護師として仕事に復帰。その後、働きやすい環境を作りたい、政治に若い世代や女性の声を伝えたいと、政治の道に進むことを決意した。2022年4月、甲斐市議会議員に初当選。現在、小学校1年生、年中の2児の母。

Q 女性が政治に参加する意義は？

・女性の声が政治に反映される。
・女性にしかわからない、多々ある問題の糸口となる。
・女性政治家がいると女性特有の悩みでも声に出しやすくなる。

Q 女性が政治に参加するときの「壁」は？

・議会は「男性社会」であるという固定観念。女性の少なさによる仕事にやりにくさがあること。



お忙しい中、ズームで参加して下さいました。

若尾議員の1日のスケジュール



4:00 起床 議会の準備
6:00 朝食、お弁当作り、家族を起こす、朝の準備諸々
8:00 子供の見送り
9:00 登庁～業務
18:00 公務終了 子供のお迎え、夕食
21:00 子どもと一緒に早めに就寝……→ハード！！

以前から公共の授業で「山梨では女性議員の割合が低い」と聞いていた。しかしなぜ女性議員の力が求められるのか、男性だと何か不都合があるのか？ 私たちの最初の、率直な疑問だった。

今回、初めて女性議員の方の生の声を聞き、とても貴重な機会となった。また、女性議員の必要性が見えてきた。

若尾さんの話で特に興味深かったのは、「女性議員を増やすことは女性に多々ある問題の解決の糸口にもなる」という一言だ。

調べてみると、例えば育児や介護には、現状で女性が多く関わっており、男性だけでは現状がつかめない、必要な配慮が反映されにくいといった問題が多く挙げられていた。

もちろん、男女の区別なく育児や介護を担う社会にするのが大事なことは言うまでもないが、それと並行して、まずは何と言っても女性議員を増やし、女性の意見を反映できるようにしなければならぬと思う。

一方、日本の女性議員の割合が伸び悩む原因として、家事や育児との両立の大変さ・忙しさは問題として挙がるだろう。

そこで私たちは、若尾さんの忙しさを「学校生活」に置き換えて、スケジュールを参考に「家事と勉強時間の両立」を体感してみた。やはりとても忙しく、余裕ある生活は到底送れなかった。少しでも家事を分担出来るパートナーがいたら、しっかりと「勉強時間」が取れたと思う。女性議員として働く人にとっても同じことが言えるだろう。

体験から、私たちは男性の育児休暇を義務化できないだろうか？と考えた。果たして実現できることなのか？

引き続き、更に多くの人へのインタビューや調査を行い、学びを重ねていきたい。

実は、議員は 女性も働きやすい仕事です！

INTERVIEW 3

藤田亜由未さん（南アルプス市議会議員）のお話から

政治は、議員になる前には、興味がない縁遠い存在だったという藤田さん。元々、いろいろな人が気軽に立ち寄れる「居場所」づくりを計画していたそうです。

→「居場所」があれば人生の選択肢が広がる！

→個人で駄菓子屋的な施設を作ろう

→その時！ 議員になったら、と知人に強く勧められる。

→2020年11月、南アルプス市議会議員に初当選（女性では当時史上最年少の39歳）。



（立候補の思い）

・子育て世代や現役で介護をやっている人たちといった現状をリアルに知る「当事者」が議会に
いなくていいのかな？という問題意識

・議会は「公的な制度を作れる」「地域に与える影響が大きく地域の決定に物申せる」

“影響力がある議会に様々な境遇の人が集まればいいね。”

市議会はスケジュールがある程度決まっており、自分が自由に動ける時間も取りやすく、

子育ても終盤の今、議員という仕事は女性にとって働きやすい！と感じているそうです。

時代に応じて対応できる「柔軟性」が大切

INTERVIEW 4

笠井辰生さん（山梨県議会議員）のお話から



男性議員である笠井辰生さんにお話しを伺うことができました。女性議員の少なさについて伺ったところ、やはりとても深刻に思っているとおっしゃっており、「例えば災害時の際など、どうしても同性だからこそ被災者に寄り添える、ということもできます…。女性の力が求められています。」と私達に話してくださいました。また、クォーター制についても、「まずは立候補する女性を増やす意味で、私は導入すべきと考える」とおっしゃっていました。

例えば、子育て世代がより参画しやすく、という意味で、議会にオンライン会議を導入するのも良いし、過去のやり方一つに縛られずに、日々変わっていく時代に合わせて、よりよく変えていく「柔軟性」がとても大切だともおっしゃる笠井さん。私たち若者へのメッセージとして「**他国で起きている紛争も、決して人ごとではない。身近な暮らし、社会のしくみは全て政治に繋がっている、という目線でぜひ自分事として考えて欲しい**」との言葉をいただいたことが心に残りました。

インタビューを通して

私たちが考えたこと

政治に携わる方々の話に耳を傾ける中で、今、必要な人材は「当事者」ではないかと私たちは感じた。

男性と女性、人それぞれ、ものの見方、感じ方、考え方が異なる。だから、それぞれ追い求める幸せや理想、生活は多様性に富んでいる。そこから生まれる対立を調整し、利害を一致させるのが政治家であるが、実情を知らない人がそれをやっても確実に上手くいかないというのは言うまでもないだろう。

その実情を最もよくわかっているのが「当事者」なのである。例えば、子育て中の保護者、介護を担う家族など、ライフステージによって様々だ。「当事者」が議会の中に一人でもいると、議会は住民の相談しやすい所となり、より住民ニーズに答えられるようになるだろう。

そのためには女性をはじめとする、「今まで積極的に政治参画出来なかった」方々を政治に取り込み、議会を多様化することが地方・国それぞれで必要だと考える。

これからの時代、政治家にも多様性と専門性あるいは悩みを共感できる人材が必要であると強く感じる。そのためにも女性の政治参画は必須であると考えた。

私はこのワークショップの中で女性議員の割合の低さやそれによって引き起こされる社会問題とは何かを常に頭の片隅に置きながら考えを深めてきた。

突然ですが皆さんは国会や企業の会議をイメージしたときどのような風景が浮かびますか？

私は黒っぽいスーツに身を包みこんだ年配の『男性たち』の集まりを連想してしまう。そこはカラフルではない…同質性が高い人が集う姿が私の脳裏に浮かぶ。

一方でそれは本当に起こっている。それほどうしても私達の昔からの、男性は仕事、女性は家庭といった固定概念いわゆるジェンダーバイアスが人々の中に固く残るからなのである。

そうではない。女性が育児や介護に携わっているからこそ女性や女児のエンパワーメントは経済的成長の拡大と社会開発の促進に欠かせないのである。そうとらえてほしい。

まだまだ世界的に見ても身近な家族単位で考えてもジェンダーギャップは見つけることができる。いつかはそのような言葉が出てこない世界を自分の手で創りたい。

これは私の夢であり目標だ。

甲府東高校2年 磯野 あやめ

あ
と
が
き



私は常々『政治家』という仕事に疑問を持っていた。

「私たちの幸せな暮らしのために働いているはずなのにどうして目先の自分の利益しか考えないのだろうか?」「どうして政治の世界で起こっていることが不透明で分かりづらいのだろうか?」「私たちの生活を大きく左右する仕事なのになぜ責任感が無いのだろうか?」

いろいろ挙げたらあとがきの半分を埋めそうなくらいたくさんあった。

でも、その疑問が今回のワークショップでほとんど無くなった。なぜなら、誠実な『政治家』の方々に会うことができたからである。住民に寄り添って、地域の未来のために貢献する。そして、人々の幸せのために一生懸命突き進んでいく、これほどまでにかっこいいことがあるだろうか。

『政治家』という職業は警察官や消防士、自衛官と似ているなど感じる。どれも、自分を犠牲にして、人々の安全で幸せな生活を守るために使命を持って働いている。私たちはそんな『政治家』についてもっと興味を持って、知っていくべきではないだろうか。そうすれば、政治への興味や関心を、心に持っているのではないだろうか。

甲府東高校2年 後藤 隆大

コーディネーター 田中 伊代さん (リコージャパン株式会社)

16歳から22歳までの若者たちが、自発的にこのワーキングに集まってきたという時点でとても素晴らしいと思いました。私はコーディネーターという立場でひたすら彼らに問いを投げ続けてきましたが、初日の研修では自分が何に違和感を持っているかに気付いてもらい、同じ疑問や課題感を持ったメンバーで4つのチームを作成。初対面にもかかわらず、お互いの強みをすぐに見つけて活かし合う姿、それぞれが持っている疑問や想いを伝え合い対話する姿は素晴らしかったです。行動力という面でも、性というテーマでの街頭インタビュー、LGBTQ当事者への問い合わせ、県の議場まで足を運ぶ彼らは、今後も常に考え行動できる大人になってくれると思います。答えがなくても対話することの意義を学べた6カ月でした。ありがとうございました。



最後に、みなさんの感想を聞かせてください

Aチーム

「やまなC」のポーズ
きめてます♪



山梨大学 4年 渡辺 真由

ワークショップに参加して、ジェンダーギャップが学校や家庭など身近なところに潜んでいることを強く感じました。「男の子だから」「女の子だから」といった性別に捉われずに一人ひとりが尊重される社会を作っていくために、まずは私たち自身の何気ない言葉かけや考え方を見つめ直すことが重要なのではないかと思います。その積み重ねが、未来の子どもたちが自分らしくのびのびと生きていくことに繋がるのではないのでしょうか。

山梨大学 4年 馬場 結万

まず「現状を知る」ということが大切であると感じました。ワークショップに参加してから、身近なジェンダー平等啓発のポスターに目を止めたり、自分の何気ない発言に対し「今の言葉は誰かが傷つくかな」と振り返ったりすることが増え、見える世界が少しずつ変わってきたことを感じます。この活動を通して、ジェンダーだけでなく、世の中に存在する様々な障壁に目を向けられる人になりたいと感じました。



甲府南高校 1年 小松 咲希

今回のワークショップを通して、ジェンダー問題はもちろん、教育のことや、政治のことまで学ぶことができました。なかなか考えることがないことですが、この機会にたくさん調べて、いろいろな方のお話を聞いて、ジェンダー問題に対して意識を向けることができました。まだ、学生であるのに、情報誌として、多くの方に問題提起ができることがとても嬉しいですし、皆さんがジェンダー問題について考えるきっかけになれば嬉しいです。

都留文科大学 1年 花田 凧沙

私はジェンダーやLGBTQ当事者の話を直接聴いてみたいと思い、今回参加した。前期に大学でジェンダーの講義を受けていたが、一方的に話を聴くだけで自分の求めていた実践的なジェンダー研究はできなかったため、この機会に自分で講演会を聞きに行ったり、実際に自分の目で確かめたいと思った。「性教育」という広いテーマで研究を進めていく中で、日本ではまだまだ国のいわゆる“歯止め規定”に準拠した教育がなされており、社会に出た時や実際に自分に恋人ができた時にどのようにしたらよいのかという直接的なことは学ばないという性教育の現状に改めて気づかされた。しかし、それと同時にそのような現状を変えようと取り組まれている「リズムオブラブさん」や「エンパワーメントアフロッキーさん」のような団体が山梨県にもあるということを知ることができた。自分は都留市という甲府からは離れた場所に住んでいるが、これからもジェンダーに関するイベント等があれば積極的に参加したいと思っている。



Bチーム

山梨英和大学 4年 近藤 大志

今回、この活動に参加して、私たちを取り巻くあらゆる事象に、ジェンダー平等に関する課題が顕在化していることを理解することができました。その意味では、私たちのテーマとした「包括的な性教育」が、今後の日本におけるジェンダー平等を左右すると言っても過言ではないため、こうして県民の方々に問題提起を投げかける機会をいただけたことを、非常に嬉しく思います。これで活動は終わってしまいましたが、今後も誰もが平等に権利を享受できる社会のために、邁進していきたいと考えています。貴重な経験をありがとうございました。

甲府第一高校 2年 岡田 琉那

私が今回参加しようと思ったのは、「今でも顕著に差別があるの？」という疑問からでした。最近、「ダイバーシティ」や「多様性」という言葉を耳にしたり、女子の制服のズボン可により学校でも「多様性が進んでいるな」と感じることがあります。これらのことから男女やLGBTQ+の方に対する差別などは、あまりないと思っていました。しかし、この活動に参加して、自分の知識不足を目の当たりにしました。また、気づいたことがあります。それは、情報を発信することがとても大切だということです。「差別」と聞くと、心のケアのための相談所の活用や、差別を解消する法律を作るのが良いと思う人は多いと思います。もちろん、これらはとても良い事だと思います。しかし、根本的に差別を無くすためには、差別を差別として認識していないことを解消しなければいけません。私たち一人ひとり、被支援者であり、支援者でもあります。だからこそ、私たちが、調べたり、活動に参加したりする事は、とても大きな意味のある行為であり、こうしたことが現状を変えていくのだ、と私は思います。



Cチーム

甲府東高校 2年 伊藤 聡音

あまり知らなかった「ジェンダー」について、考え話し合ったことはとても大切な経験になりました。実際にLGBTQ当事者の方から聞いたお話は何よりも心に残っています。よく分からないから遠ざけるのではなく、自ら知ろうとすることで必ず得られるものがあると思います。まだジェンダーについて完全に理解したとは言えませんが、理解するためのきっかけは得ることができました。ここで終わらせず、これから私にできることをしていきたいです。「目を向けられる人になりたい」と感じました。

甲府東高校 2年 石田 さくら

このワークショップで多くの対話を重ね、自分のジェンダー観の変化を感じました。「ジェンダー平等」を実現するための最適解はたった一つではなく、世界中の人の数だけあります。だからこそ私たちに求められていることは、自分の都合を押し付けず一歩相手へ歩み寄る姿勢を持つこと。それが大事だと感じました。私はこれからも「学ぶ者」として、そして今回得た経験からジェンダー問題を「伝える者」としてジェンダー平等の実現へ貢献したいです。

Dチーム

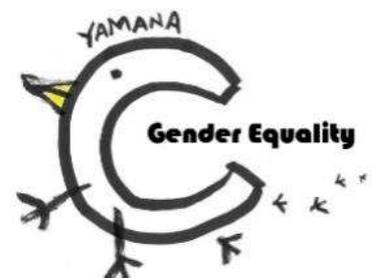
甲府東高校 2年 後藤 隆大

私は「興味を持つ」ということこそがジェンダー問題のみならず、様々な現代の諸課題を考えるうえでの“きっかけ”になると、ワークショップでの体験を通して心の底から感じます。私たちにとってこのワークショップはとても貴重な経験となり、未来を考える“きっかけ”になりました。そんなワークショップの賜物であるこの情報誌が、お手に取ってくださる皆様にとってもジェンダー平等やこれからの未来を考える“きっかけ”になれば幸いです。



甲府東高校 2年 磯野 あやめ

この活動を通して自分自身大きく変わることができたと思います。だから、皆様にもぜひ考えてもらいたいです。「なぜジェンダー平等が大切なのか」ということを。まだまだ世界的に男女格差はなくなっていません。しかしどこで暮らしていても「ジェンダー平等」は基本的人権の一つであり健全な社会を作る上であらゆる側面で欠かせない事なのです。だからこそ私達はジェンダーについて真剣に考えていかなければいけないのだと思います。またその活動は私たち若者が率先して先頭に立ち行動していくべきことだと今思っています。



やまなし (C) のジェンダー
一平等
一歩ずつ

この情報誌は、県のHPでご覧いただけます



発行 令和5年12月
山梨県男女共同参画・共生社会推進統括官
〒400-8501 甲府市丸の内1-6-1
TEL055-223-1358 FAX 055-223-1320
E-mail danjo-kyosei@pref.yamanashi.lg.jp